

## 創立百周年を迎えるにあたっての宣言

同志社は、明治八年新島襄によって創立されました。昭和五〇年に創立一〇〇周年を迎えます。新島襄はキリスト教的良心に根ざした人間教育が日本の将来にとって重要であることを指摘し、神を信じ、真理を愛し、人格を尊重する人間教育を基調とする大学をわが国に設立することを願いました。新島襄は「同志社大学設立の旨意」のなかで「一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず。實に一国を組織する教養あり、知識あり、品行ある人民の力に抛らざる可からず。是等の人民は一国の良心とも謂う可き人々なり、而して吾人は即ち此の一国の良心とも謂う可き人々を養成せんと欲す。」と述べて国家百年の大計として長期の展望に立った人間教育の重要性を強調しました。

一〇〇年の歴史において同志社は立学の教育理想による独自の学風を形成し、わが国の学術文化の発展に寄与してきましたことは言

うまでもありません。また幾多の有為な人材を世に送り、社会経済の発展のためにつくしてまいりました。そのなかには社会の歪みに対して敢然と批判の鞭を加える先覚者や、さらに社会のために地の塩となった人々もあつたことは忘れてはなりません。このように、同志社が日本の社会に貢献してきた功績は高く評価することができます。

しかし、われわれがここに同志社の一〇〇周年を迎えるにあつて、国家百年の大計としての立学の教育理想が、その後の歴史のなかで十分開花するに至らなかつた点もあることを、この際謙虚に反省し決意を新たにしなければなりません。このことは一〇〇周年を期して、われわれが同志社創立の理想の原点に帰り、その今日的意義を再吟味することを意味しています。

今日、現代文明の大きな転換期においてこそ、われわれの祈念するキリスト教的良心に根ざした教育理想の実現がわが国のみならず国際社会においてもつよくのぞまれるのであります。

新島襄は「余が畢生の心願たる、此の一大事業たる、大学設立の為に、一身を挙げて当らんとす、願くば皇天吾人が志を好し、願くば世上の君子吾人が志を助け、吾人が志を成就することを得せしめよ。」といまもわれわれに訴えています。

# 立学の精神が更に全学に起こり来たらんことを

——創立百周年の宣言とその系譜——

小 松 幸 雄

## 一、初めに祈りがあった

今から百年前、正確には明治八年十一月二十九日午前八時、同志社英学校の開校に先だつ一時間前だつたといわれる。新島先生の仮寓（現在の新島旧邸より東百数十米の地）において、先生によって歴史的な祈禱がもたれた。これに参加した人々はJ・D・デヴィス宣教師夫妻、已に盲目となられた山本覚馬氏とその娘——後の新島先生夫人との数名であった。この祈禱はデヴィス宣教師が、生涯これほどの感激的なものは知らなかったとした歴史的な祈りであったと伝えられている。この祈禱の中に同志社学園の理想は祈られ、同志社の事実上の精神的誕生はあったのだと考えられる。そしてそこに参加した人々の同志の堅い結果も生まれたものであろう。もちろん、

新島先生の留学中、いつの頃からか大学設立の希望がめばえたかは知らぬが、同志社大学設立の旨意に「不肖を顧みず他日吾国に帰らば、必ず一の私立大学を設立し、以て我が国家のために微力を竭さんことを誓い」とあることからして、永く胸中に暖められていたことは明らかである。これらの人々は出生もちがいが、経歴も異り、交遊の期間もさまざま長くはなかった。この三人の出合いこそ神のおんみちびきであったといえよう。ただ偉人は偉人を知り、純粹の人は純粹の友を求めるといえるのか。三人の意気はすぐ投合し、ついに終生の友となり同志となったのである。この同志三人によってささげられたあの清純で激しい祈りが、近世の日本黎明期においてほかのどこでみられたであろうか。明治維新前後、愛国の青年志士に血盟の誓いが方々でみられた。これも純一無垢のも

のに違いないが、そこには猛りと気負いがあった、血腥いものが感じとられる。前者の精神革命と政治革命の違いであろう。およそ人間がとる行為として祈りの姿は美しいものである。よしんばそれが病氣平癒のものであれ、身の危険に当たつての祈りであれ、その動機が打算とエゴから出るものであつても、当人がひたむきに精神を一点に集中して、神仏に祈る姿は、これはこれで美しいと感ぜられる。ところがさきの新島先生の祈禱の言葉による同志とこの時の祈りは、神への絶対の信頼の下に、その下僕として、神のみ言葉にこたえんとするものであつて、人間としてとりうる美々しくも気高いものであつたであろう。新島先生が渡米以來十年、心に温めつつけられた学園創設の理想と情熱をぶちまけられた精神のたぎり、その清純と敬虔さは、人間が人間から抜け出した純美の結晶ともいえる姿であつたと想像される。人は一生の中、誰がこんな崇高な祈りをもつことができるであろうか。三つの魂が一つにとけ合つて燃焼し、そこでは火花さえ散つたであろう。三人の出合い、三人の同志の祈り、そして同志社の誕生、これこそ神の摂理と感じられる。同志社学園の性格はここに烙印されたと考えられよう。

## 二、新島先生の爛眼

およそいつの時代でも社会の変動期には洋の東西を問

わず、不思議に勝れた人々が現われるものである。幕末から明治の初期にかけて英才雲のごとく現われ、新日本建設が各方面で進められた。長い封建社会の中でうっ積され民族の情熱のほとばしりがみられた。欧米の文明開化は、便宜主義衝動主義ともいえる選択の下で流れこんだ。新しい国造りの枠組の制度の輸入もさることながら、維新革命が国家の独立の脅威から起こつたこと、そしてこの独立の維持・防衛の手段としての物的条件の整備の必要が何よりも急がれた。富国強兵、殖産興業が新国家建設の合言葉となり、教育も学校制度も言わばこのための手段とさえなり下がる危険があつた。われわれは新島先生がこの情勢の中においてこそ国立大学と違つた私学建設の必要と教育の自主自営の權威の確立の必須を見通しておられる爛眼を思うべきであろう。それに對して時の為政者には、欧米のこの文質文明を作り上げ、そしてそれを支えている幅広い精神文化のあることは見破れなかつたといえよう。欧米の民主的自由で、平等であり、しかも人類愛を基本とするキリスト教に基づいた倫理道德と、わが国の縦社会に発達していたそれとは異質のものであることが見抜けなかつたのである。精神文化は日本の古来のものが勝るといふ先入観が支配してたと見られる。

新島先生がアメリカ文化の偉大であることを捉えたのは、電話器や汽車、汽船、農業技術によるものでもなか

った。先生が偉大と見たものが、その高い物質文明の背後に、プロテスタントの精神が健康にして生き生きと息づいている事実であった。彼はこの人民のもつ高い教養と品格ある節度こそ母国日本への最大の贈物であると考えられたのであろう。文明を支える人民の人造りこそ急がねばならぬとされ、そしてその精神の普及には私学の建設こそがその目的達成の近道だとされた。しかも最も保守伝統を重んずる京都の地を選んだこと、これにもいろいろ理由があったであらう。勇氣と決断のいったことであるが、神われと共にありという、確信する人だけがなしたものである。

とにかく、初めに祈りがあり、同志社学園は誕生した。希望と光にみちたものであったが、現実はきびしい苦難の多いものであったといえよう。国家の庇護があったのではなく、ただひたすら神の加護を祈り、財に恵まれたものでなく、同志の結束から、祈りから出発した学園であったのである。敢て苦難の道の選択が行われたのである。設立の旨意に「茫茫たる天下実一人の朋友なき有様」とか「基督教主義の徳育は、独り愚民のために嫌悪せらるるのみならず、又世上の大人君子よりも非常なる冷遇を蒙りたり」、このべられてゐる。

### 三、初めに言があった

聖書の「ヨハネによる福音書」にある「初めに言があ

った」という句の正確な解釈をわたしは知らない。ただわたし流に理解させていただくなれば、一人の間であれ、団体の行動であれ、もしくは一つの国家が体制の切替えをして新しく生まれ変わろうとする場合、宣言や誓約が出されることがよくある。これが初めに言があったと考えられるのではないかと。M・ルーターが新教活動の第一歩として、ウィッケンベルク城教会の門に張った九十五カ条からなるもの、アメリカの新しい国家造りの理想をのべた独立宣言文、わが国においても明治維新の五カ条の御誓文、みなそれぞれ世界の歴史の中においても輝かしい文字となっている。これらのものは決して一夜漬のものでなく、どれも長い思索と過去への反省と将来の見通しがのべられているといえよう。例えば五カ条の御誓文にしても坂本龍馬の藩論から更に船中八則に集約され、それが土台となって五カ条の誓文に結晶したといわれる。

「同志社大学設立の旨意」は言うまでもなく同志社の教育理想と私立大学のわが国における存在理由、官学と如何に異なる意義をもっているかをのべ、設立に至る永い間の困難な経過が簡潔雄大な文字となっているのである。これは最初にのべた新島先生の米國留學中や同志三人の敬虔な祈りの中に大きく育ち、さらに十数年の経験を通じて成文化されたものであろう。研究活動の自由の保証は言うまでもないことであるが、特に強調してある

ことは人間教育、良心教育の重視であり、教職員、学生相互の人格尊重でもある。大学教育が単に専門知識の切り売りの場ではなくて、知徳あわせ練磨することの必要がのべてある。「其教育の懇篤にして親切なる、其学校の徳育智育二つながら並行して、決して偏僻なる教育に陥らざる事」は設立旨意に明文となつてゐる。これらは正にキリスト教をもって徳育のよりどころとすると言言した同志社立学の精神からすれば、当然のことである。「この言は神と共にあつた。すべてのものはこれによつてできた」と聖書にあるように、同志社大学設立の旨意は神と共にあつたものとも言えよう。「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」という句も想い起こす必要がある。祈りと、同志の結合と、神の言によつて生きる学園の存在は、たぐい少ないものといえよう。

#### 四、時は移り、思想は変わる

F・ニーチェが「神は死んだ」としてヨーロッパの近代の精神的危機を訴えてからすでに半世紀以上すぎ去つた。彼は新しい価値創造によつて文明の転換を計らんとしたのであるが、ファシズム思想のよりどころを提供して、歴史は暗転した。実在主義の哲学が生まれ、人間論が花開いたとしても、まだ豊かな結実があつたとはいえないのではないか。一方近代合理主義思想の「まな息子」

としての科学は目ざましく発達をとげた。宇宙の神秘に挑戦し、技術への盲信は、人類文明の永久進歩への幻覚をさえ発生させた。科学こそ人類の新しい信頼に耐えるものとして、神の座に据えようとする。科学万能、そして物質万能主義は物神崇拜そのものとさえなろうとする。確かに物への狂信は、人間の物質生活を恐ろしく豊富にし、「豊かな社会」を作りだした。だけれどその豊かな社会の中で人間の精神生活の眞の豊かさがもたらされたであろうか。虚飾と虚礼とみせかけの繁栄。他方公害、騒音、自然破壊、社会不安の増大、社会的公平の危機、悪徳と犯罪の累増。大学は大学でかつては象牙の塔などと言われたものが、現在は灰色の虚塔となり、壁新聞の満艦飾になることが多い。知性の府が暴力のまかり通る巷となり下ることさえある。

こんな筈ではなかった。どこかが間違っているのだ。どこかが狂っているのだ。科学の信仰が間違っていたのか、近代合理主義精神は表れたのか。人は言う文明の転換期だと。また時に人は言う。人類文明の終末紀だと。

#### 五、百周年を迎える宣言と立学の精神

ともかく、現代文明は大きなうねりをみせて変わらうとしてゐる。これは日本だけのことでなく世界的にみとめられることであろう。ちょうどこの転換期に當つて、わが同志社は創立百周年を迎える。千載の好機と言つ言

葉があるが、考え方によれば百歳の好機といえよう。

われわれはこの百周年をどう祝福し、どう意義づけてこの転換の社会の中に学園の座標をどう据えたらよいか。新しい世紀に向けて歩みをどの方向から進めたらいいのか。後世に残る記念事業は何が考えられるのか。

これらについて、詮索と詮議がもたれ参考資料も集められた。しかしこれらにはあまり時間はとられなかつたといえよう。衆議の集るところはおのずから、立学の精神の復活であり、その充実であつた。私学と同志社学園の特色発揮ということであつた。

確かに時は移り世は変わった。万物は流転を続ける。

さきあげた世紀の名宣言文もそのうちにはまた別のものも生まれよう。時代の波に洗われて一世の名言も風化と陳腐化をまぬがれぬものであらう。だけれど同志社大学設立の旨意は、当時あまりにも先駆的思想であつたのか、或は世紀を先どりした高い教育の在り方の理想が語られているというのか、現在の時点に立つて、それを読み返してみても、われに反省と勇氣と光を与えるものが多いのである。

「宜しく欧米文化の大本たる教育に力を用ひざる可からず、顧ふに我が同胞三千余万、将来の安危禍福は、独り政治の改良に存せず、独り物質的文明の進歩に存せず、実に専ら国民教化の力にあるを信す」とか、「其徳性を涵養し、其品行を高尚ならしめ、其精神を正大なら

しめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用するの人物を出さん事を努めたりき、而して斯くの如き教育は決して一方に偏したる智育にて達し得可き者に非ず」云々。また「人民の手によって設立する大学の実に大なる感化を国民に及ぼすことを信ず、元より資金の高より云ひ、制度の完備したる所より言へば、私立は官学に比較し得可き者に非ざる可し、然れども其生徒の独自一己の氣象を發揮し、自治自立の人民を養成するに至つては、是れ私立大学特性の長所たるを信ぜずんば非ず」。

また曰く「吾人は敢て科学、文学の智識を学習せしむるに止まらず、之れを学習せしむるに加へて、更に是等の智識を運用するの品行と精神とを養成せんことを希望するなり、而して斯くの如き品行と精神とを養成するは決して区々たる理論、区々たる検束法の能く為す所に非ず、実に活ける力ある基督教主義に非ざれば、能はざるを信ず、是れ基督教主義を以て、我が同志社大学徳育の基本と為す所以ん、而して此の教育を施さんが為めに、同志社大学を設立せんと欲する所以んなり」。

これらの引用の一端をひもといひてみても、われわれに反省と勇氣を与え、同志社学園の他と異なる特色を教えるものがある。いまわが国で教育理念の混乱と新しい教育目標の模索がなされていると見られる。同志社学園では設立当初から智育偏向の弊害が指し示され、人間教

育、良心教育の重要がうたい上げられている。ただその理想が百年の歩みの中においても実現できなかったところに問題が残ったといえよう。今後百年を目ざして、この教育理想の実現と成果が期待される。実に教育の業は一國百年の大計であり、更に二百年、三百年の絶え間ない努力を要するものであろう。この道やまた遠いかなである。

三人の同志の三人の祈りから出発し、一粒の種は今や亭々とそびえる大樹となった。八人の学生から出発した同志社学園は、今や二万数千の学生、生徒をもち、教職員は千数百を数える。ここから巣立った生徒は已に十数万となった。だが最初の開校に先だって祈りの中にのべられた言葉は、脈々とうけつがれ守り通されて、今日の百周年を迎えるに当たっての宣言となつてよみがえってきた。風雪を侵して咲いた寒梅は今日も匂いつづける。

同志社に栄光あれ、立学の精神が健全である限り、同志社人が同志の結びを誓った先人の初心を忘れぬ限り、寒梅は香気を放つてあろう。

(同志社創立一〇〇周年記念事業事務局長)

## 新島襄研究参考図書

My Younger Days

同志社校友会

新島先生書簡集(森中章光編)

同志社校友会

新島先生書簡集―続(森中章光編)

同志社校友会

新島襄書簡集(同志社編)

―岩波文庫

岩波書店

新島襄先生(徳富蘇峰著)

同志社出版部

新島襄―人と思想(魚木忠一著)

同志社出版部

新島襄(岡本清一著)

同志社出版部

新島先生と徳富蘇峰(森中章光著)

同志社

同志社九十年小史

(同志社々々史料編集所編)

同志社

雑誌「新島研究」

同志社新島研究会

新島襄(和田洋一著)

日本基督教団出版局

※比較的参照しやすいものを掲載



## 同志社創立一〇〇周年記念

### シンボル・マーク

同志社創立一〇〇周年記念事業実行委員会は、記念シンボル・マークのデザインを行動美術協会員田中忠雄氏に依頼し、昨秋完成、すでに各方面で使用されつつある。

作者の考案によると、構図の枠を原始キリスト教のシンボル・マークであった魚に求め、その中に同志社の校章と1975および100の数字を配し、全体をスクール・カラーの古代紫と白で染め分けたものである。魚が原始キリスト教のシンボルとされたのは、「イエス・キリスト・神の子・救主」の五字にあたるギリシア語の頭文字を抜き出して組み合わせると「イクシユス」という語となり、これが「魚」を意味するところからであった。キリスト教主義精神を建学の基礎とする同志社にとって、まことに適切な図柄といえよう。

田中画伯は京都高等工芸専門学校

(現工芸繊維大学)図案科の出身。渡仏留学ののち、二科会をへて「行動美術」創立に参加し、じらい、中心的存在としてその発展に尽くしてきた。日本美術家連盟元理事長、武蔵野美術大学名誉教授でもあり、本邦におけるキリスト教美術の第一人者としても、つとに有名な人物である。同志社には、神学館礼拝堂ステンド・グラスと壁面彫刻、および栄光館瞑想室インテリアなどの作品がある。画伯は新島先生の直弟子田中兎毛氏を父として明治三十六年札幌に生まれたが、父兎毛氏は同志社の分校東華学校が明治十九年仙台に創立されたとき、新島先生により市原盛宏らとともに選ばれて派遣され、その教師となった人である。一〇〇周年のシンボル・マーク考案者として、これ以上に適わしい人は見出せないであろう。

(選藤 彰・大学神学部教授)

# 天にあるふるさとを望んで

シカモア組合教会と同志社

竹 中 正 夫

はてしも知れない数千マイルの大洋を越えて、未知の大陸に渡った先達たちが、よるべのない異郷で聖書に根ざした信仰に希望を見出し、オークランドの地にシカモア組合教会

を創立したのは、一九〇四年、明治三十七年のことであつた。それは、荒地にまかれた小さな種のような少数者の交わりにすぎなかつた。

ほんの一握の少数者にすぎなかつた初代の信徒たちが現存して、七十周年の祝典に参加し、一世、二世、三世、そして四世の人々と伝わりつつある信仰の木の成長の姿をまのあたりみるなら、感謝と喜びを共にされることであらう。「涙をもつて種まく者は、喜び

の声をもつて刈り取る」(詩篇一二六ノ五)という詩篇のことばはここにおいても成就しているように思われる。

シカモア教会の歴史については、内田淑子さんが書かれたものが、森悠子牧師夫人によって訳されて出版されているので、わたくしは、御教会と同志社との関係について、三つの点にふれてみたいと思う。

(一)創立時代の牧師大久保真次郎

シカモア組合教会の初代の牧師は大久保真次郎であつたことはよく知られている。彼は、豪放な気性の人で、波瀾の多い生涯をすごした人物である。大久保は、安政二年(一八六五年)三月一〇日熊本県に士族の長男と

して生まれた。七歳にして漢籍を学び、明治四年一六歳のとき医師になることを志して、熊本にできた藩立医学校に入り、さらに、明治七年一九歳のとき、東京大学の医学部の前身である医学校に入学した。成績もすこぶる優秀で特待生となつてゐる。もし、この人が順当に進んでいたら、明治初期にいち早く西洋医学を学んだ医者として、日本の医学史の先駆者となつたことは間違ひなかつたと思う。しかし、明治一〇年の西南戦争にあつて、血気さかんなる大久保は感ずるところあつて医学をやめ、京都西本願寺において、仏典を研究し、翌十一年同志社に入学、新島襄の下に訓薫を受け、彼から洗礼を受けた。し

かし、キリスト教の信仰に疑いをもちはじめ、法華經中に一切衆生仏と等しいとあるのをよりにどころとし、却って、自分の放縱傲慢を正当化し、新島の下を去るに至った。新島は、それに対して「終ニ臨ミ一言ス曰ク兄ノ為ニ真神ニ祈禱止マザルベシ」①といつて、大久保のために絶えず祈る姿勢をもつてした。明治十三年彼の二十歳のときのことである。

同志社を去った、大久保は、はじめ、東洋会社という汽船会社を興し、少しの成功に自負心が増長し、一年もたらず事業に失敗する。ついで、自由民権運動のため東奔西走り、明治一八年流浪者のようになり尾道に寄



大久保真次郎

留するに至った。彼の妻、音羽は、やはり熊本の出身、徳富一敬の第四女であり、蘇峯の姉であり、横井時雄の導びきを受けてキリスト教の信仰を持ち夫の信仰回復のため忍耐をもつて祈りつづけた。自からの許を去った弟子に對する新島の祈り、信仰を失つて放縱に走る夫のためにささげる妻の祈りが通じたのか、明治二十年、真次郎は尾道にて再び聖書を読み、回心の経験をなした。同年五月、京都の同志社に新島襄を再び訪ねた。新島はいにく病のため逢うことができなかったの

で、大久保に親書を認め、その中でつぎのよりにのべている。

「過日御來京之節大病にて拜眉を得ざりしは甚遺憾之至。(中略)

切貴兄之再び天父之恩恵を蒙りし事は、実に小生等之深く天父に謝する所、尚此上も貴兄之為祈禱して怠らざるべし。貴兄よ貴兄は平素邦家之為に計らるるは、小生の頼に知る所也。邦家之為に盡さんとなれば、先自己之改革を要する也。人心之改革なくして物質上之改革なんする者ぞ。貴兄よ願くは心を虚くして天父之誘導を仰ぎ賜え。天父必らず貴兄に示すに前途為すべき事を

以てせん。小生も及ばずながら、貴兄之御相談に加わらんとす」②

この新島の書簡は、長くシカモア教会の旧会堂の入口のところに額に入れてかけてあった。内田堯兄が、同志社創立九十周年のおり、同志社に寄贈され、今日では、同志社において大切に保管されている。

大久保は、その後明治二十年九月同志社に復学し、新島の訓薫をうけ、明治二十二年卒業後、武州大宮町をふり出しに、新島の郷里上州の諸教会の伝道教会にあたり、明治三十年十月五日按手札をうけるに至った。明治三十五年九月、ホノルル、ヌアヌ日本人教会の牧師として赴任し、三年間牧会に励み、明治三十七年九月、オークランドに赴き、王府日本人組合教会の創設のため尽力するようになった。

このことをみても、いかに新島が一人の弟子を愛し、彼の門下を去つたのちも絶えず祈りをもつて顧み、また大久保も回心の体験をなし、師のもとに帰り、その祈りに答えて伝道者として献身していったかがうかがわれる。

シカモア教会の創立は、偶然のようにして

偶然にあらず、恩寵のはからいの中にあつたことをしめし感じるものである。

### (二) 自給独立の精神

大久保真次郎は、豪勇情熱の人であつた。人は、彼を評して『容貌魁偉音吐朗々、その右手を高く延ばし、五本指を十分に広げて、『神は愛なり』と下に降すや、その身振り、内容に相応せず、恰も「捕つて食ふぞ」と言い居るが如し』<sup>⑧</sup>とのべている。ハワイアンボードの招きに応じてハワイにゆくとき、泣いて別れを惜しむ人々に、「満三ヶ年間首尾克く相勤め候内に巨万（笑う）勿れ法螺に非ず」の金を蓄え、それを以て、亜米利加歐羅巴の二大洲を縦横無碍に踏破し去り、前後五個年の後尚一層若返りて目出度帰朝する積なり』<sup>⑨</sup>と壮語した。

このとき、大久保は三十七歳であつた。彼のこの訣別の辞は残念ながら実現しなかつた。はじめは三年のつもりであつたが、ハワイからオークランドに渡り、大正三年、一九一四年五月一〇日、オークランド第二十街で天に召され、とうとう骨を大陸に埋めた。ふるさとに錦を着て帰るのではなく、天上のふるさとに望みをもって地上においては旅人と

してその生涯を終えた。巨万の富を得るどころか、終始貧乏に追いまくられ、妻音羽は、白人宅の下ばたらきをしながら家計を支えたり、一男三女の子宝に恵まれながら久布白直勝牧師にとつがれた長女落美さん<sup>⑩</sup>を除いて、みな夭折したり、それは苦勞の連続であつた。彼は死ぬ一年前、愛する祖国に久方ぶりに帰り、その間、脳溢血症を患い、親戚知友みなとめたにも拘らず、米国在留同胞のことを想い、再び米国に渡り、不帰の客となつた。世間的尺度からするなら、彼は功なり名とげることなく、富もなくなんら華々しいところなく生涯を終えた悲劇の伝道者のようにさえ思われる。しかし、神の国の視点からするなら、大久保真次郎牧師の生涯には豊かな恩寵の露が宿されていたと言っても過言ではない。

大久保が新島からうけた教訓の中でも、とくに彼が大切にしていたのは、自給自治教会の形成ということであつた。これは、新島襄の畢生のモットーでもあつた。明治二十二年組合教会と一致教会の合同が頓挫したのち、間もなく新島は、当時武州大宮町で伝道していた大久保にあててつぎのような書簡を送つ

ている。

「貴論の如く合併は無期中止と相成可事と存上候と雖も、武州は充分自由自治の金城鉄壁を築き、尚將來に備へおく事まづ甚必要なるべしと存候

襄畢生の目的

自由教育 自治教会両者併行国家万才」

⑩と記し「血涙共之を勺<sup>？</sup> 貴兄宜しく生の衷情を洞察あれ」とわざわざ細字で添書し

皇国を思う丹あかき心を朝間山によせてと題して

朝な夕な 峰に烟のたえざれば

山の心根如何あるらん

という一首をうたつて彼の心情を吐露している。

大久保は、この精神を体してシカモア組合教会の創設にあつた。他の教会が経済的基盤のある白人教会の援助に頼ろうとするとき、自由・自治の精神を鼓舞して、独立教会の形成をめざした。

当時のシカモア教会は、ごく少数のメンバーからなる小さな教会であつた。しかし、伝道開始らしい二年もたたない一九〇六年一月

七日には、独立した教会を形成するに至り、その名も王府日本人独立教会となえるに至った。この小さな教会は、多くある北米の日本人教会の中で、最初の独立教会として記録される名譽を得たのである。

このことは、今日、いわゆる少数者グループの問題を考えるにあたって、そして、アジア、アフリカ、南米などの国々の開発の問題を考えると、きわめて大切なことであ



内田堯夫妻

る。すなわち、国にしても、教会にしても、そして個人の人格にとっても、健全な成長のためには、それぞれの主体の独立と自由が尊重され、それぞれの人々の自立性が強められねばならないということである。今日ではこのことは、当然のこととして認められてきている。しかし、依存隸属関係が強かった七〇年も前に、すでに大久保牧師を中心に、シカモア組合教会はそのことを実践したのであ

る。それは、決してなまやさしい道ではなかった。しかし、会員相互の協力と犠牲によって達成されたその精神は、後世への大きな遺産であると思う。

### 援 三 同志社大学神学教育の後

異郷の地にあつて、自給独立の教会を形成されたのみでなく、大戦中には、立退キャンプに収容されたり、幾多の痛手を負われたにも拘らず、シカモア教会の信徒たちは、遙か遠くの

母国日本の教会をおもひ、とりわけゆかりのある同志社大学の神学部に通学した者の後援をつづけた。

このことは、創立者大久保牧師が同志社の卒業であつたことによつてゐる。また、のちに同志社の総長になられた湯浅八郎氏も青年時代この教会の交わりの中で、育まれたことや、石川清牧師をはじめ、額賀鹿之助、泉弘、飯 清、金宋元、万代慎逸、森孝一など同志社大学神学部の出身者が歴代牧師のなかに少なくなつたことによると思われる。しかし、何と言つてもシカモア組合教会と同志社を結ぶ紐として記録されるべきことは、内田堯御夫妻の働きであらう。

戦前戦後とわすれず、同志社を卒業して北米に留学した青年たちで内田夫妻を迎えられ、また、シカモア教会の交わりに励まされたものたちがどれだけ多くあつたことであらう。かく申す私もその一人である。

内田郁夫人のうたに、こういう作品がある。⑦

東より 西より集ふ あまた船宿りを得つ  
つよき港かも

友を送り 友を迎ふる港まちの秋のちまた  
を去りかねてけり

異郷に学び来れる若い学徒たちを迎え励ま  
すだけでなく、戦後の困難な時代に同志社の  
神学教育を後援しようという運動が起きた。  
一九五〇年渡米した大下角一神学部長が、研  
究誌「基督教研究」が資金難のため発行が困  
難であることを訴え、これを支援するように  
なったのがはじまりであった。次第にそれが  
神学生の奨学金の後援と展開し幾多の伝道者  
の輩出に寄与してきたのである。

この募金運動は、一九五一年から六二年ま  
で、十一年間続けられた。はじめは九十名の  
人々から二九七ドル五〇セントの據金があっ  
た。それいらい、毎年約一、〇〇〇ドルの募  
金がなされ、参加した人々は十一年間で延  
二、二〇二人、集められた金額は、九、七九  
六ドル五〇セントにのぼっている。この仕事  
の中心になって会計を担当されたのが内田堯  
氏であり、それは、後援会長を務められた石  
川清牧師のつぎのことばによくあらわされて  
いる。

「われらの事業が好成績を挙げえたのは会  
計の内田堯氏に負うところが大きでありま

す。氏は異常な愛校心の持主であるばかり  
でなく、氏の社会的信用と事務の敏速さを  
もってこの事業を運営するための多大の貢  
献をされたのであります」。

内田さんは一九六一年ストロークで倒れ、  
半身不随となったのちも、不自由な左手で記  
録をつづけた。会計簿をみると、郁夫人があ  
るときはそれを補い、淑子さんがあるときは  
助け、文字通り家族ぐるみでこの運動を継続  
された様子がありありとうかがえる。一九六  
三年、一世の年齢も進み、永眠者が相ついで  
ことから、百万円の募金をし、それを神学教  
育基金とし同志社に送り、永久に在米同胞の  
信仰による贈物として記念し、この運動に終  
止符が打たれた。

良心の全身に充滿した丈夫の輩をねがって  
新島襄によって創立された同志社は本年創立  
百周年を迎えようとしている。わたしは、  
その源流に立ちかえると共に、この時代に  
新島の精神を生かした教育のあり方を考究  
してゆきたいと思う。それは、とりもなおよ  
ず、キリスト教の精神に根ざした国際的な良  
識ある日本人の形成に外ならないと思う。そ  
のような視点から、海外におられる主にある

諸兄弟の御祈りをいただくと共に、新しい協  
力関係をきずいてゆきたいと思う。

(大学神学部教授・宗教社会学)

\* \* \*

(注)

- ① 大久保真次郎宛新島書簡 明治二〇年  
四月十二日付。
- ② 大久保真次郎宛新島書簡 明治二〇年  
五月二十九日付。
- ③ 今泉真幸編「天上之友」六十七頁。  
同右。
- ④ のちに日本婦人矯風会々々長として、わ  
が国の婦人運動に多大の貢献をされ  
た。
- ⑤ 新島先生書簡集 三三八頁
- ⑥ 内田郁子、ゆかり抄 一三〇頁、四十  
頁。